支部だより

関西支部第38回夏季大学報告

2016年８月20日（土），京都テルサ東館３階大会議室において，関西支部第38回夏季大学を大阪管区気象台及び日本気象協会関西支社の後援で開催しました．今回は「豪雨災害の実態に迫る」をテーマとし，荒木健太郎氏（気象庁気象研究所研究官）「豪雨をもたらす雲のしくみ」，大石　哲氏（神戸大学都市安全研究センター教授・センター長）「電波で見て知る 豪雨と雷」，諏訪　浩氏（東京大学空間情報科学研究センター/立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員）「京都東山の山津波」の３講義を実施しました．

講師の皆様には大変なご尽力をいただき，結果的に例年の２倍近くの厚みとなった講義資料を用いて，それぞれの専門分野のお話を熱く語ってくださいました．第一講義（荒木氏）では，積乱雲の性格とその一生，豪雨との関係，豪雨をもたらす雲のしくみについての解説があり，実際の豪雨について複数の事例を紹介していただきました．第二講義（大石氏）では，Xバンド偏波ドップラーレーダー（XRAIN）による集中豪雨探知，GPSによる水蒸気観測，雷探知装置による雷観測など，豪雨現象に関する観測技術について解説していただきました．第三講義（諏訪氏）では，京都東山の山津波の話を中心に地すべりや土石流に関する研究成果が紹介され，講義最後には天変地異によって人的被害を招かないための備えについてもお話しいただきました．

今年度は講師の荒木氏がネット上で当イベントの広報にご尽力くださったこともあり，受講者は前年度に比べて30名増の124名となりました．受講者の学会員/非会員の比率は約３対７で，職業別の内訳は，割合の多い順に会社員33%，学生15%，教員・公務員14%，自営業６％でした．受講者の方々は皆様大変熱心に聴講され，講義後の質疑応答では数多くの質問がありました．受講後のアンケートを見ても，講義のわかりやすさについて，約96%の方が「わかりやすい」もしくは「適当」と回答されており，感想欄及び自由記述欄のコメントも含めて，大半の受講者から良い評価をいただく結果となりました．

最後に，多大な協力をいただいた後援の団体及び講演いただいた講師の皆様に厚くお礼申し上げます．

（関西支部）